

聖書:ホセア書6章1～11節

説教:主に立ち返ろう

はじめに

続けてホセア書を見てまいります。ホセアは紀元前760年に北イスラエルで預言者として召され、当時人々が盛んに礼拝していたバアルから離れ、主に立ち返りなさいと警告するのですが、人々は耳を貸そうとしません。アッシリアが外交使節団を送って脅しをかけてきたとき、自分たちの知恵によりたのみ、多額の銀を贈ることにする。そうするとアッシリアは、満足して帰っていったので、人々は平和だ、もう大丈夫と思い込んだ。しかし、それからおよそ十年後アッシリアは手のひらを返すようにして北イスラエルに攻め込み、国を滅ぼし、ある人たちは捕囚となって海外に強制的に連れていかれる。

ホセアは、そのような悲惨な事件が起きる前にここにあるみことばを語りました。主は何を語ったのか。みことばに耳を傾けてまいります。

1 エフライムとユダがしたこと

1) 「そこで」

まず4節に出てくる「エフライム」ですが、これは北イスラエルの別の呼び方です。「エフライムよ、わたしはあなたに何をしようか。ユダよ、わたしはあなたに何をしようか。」このようにしてホセアは、北の国と南の国、両方の人々に向けて語りかけている。では、その呼びかけられている北と南の人々は何をしたのか。いろいろあるなかから今日は「そこで」ということばに目を留めます。二箇所あります。最初に出てくるのは7節です。「ところが、彼らはアダムのように契約を破り、そこでわたしを裏切った。」二つ目が10節。「エフライムはそこで姦淫をし、イスラエルは汚れてしまった。」

二度繰り返される「そこで」とはどこのことか。言うまでもなく、北イスラエルであり、南ユダです。もっと言えば、神がアブラハムを通して約束の地として与えてくださった場所です。神が契約を結んでくださったところで、人々は契約を破り、約束を破りました。聖書の神だけを礼拝すべき場所でバアルの神々を拝んで姦淫を犯し、汚してしまいました。

2) 祭司たちは徒党を組んだ（第二列王記15章25節）

ただバアルを拝んだだけではありません。9節。「盗賊が人を待ち伏せするように祭司たちは徒党を組み、シェケムへの道で人を殺す。彼らは実に淫らなことを行う。」祭司たちと言えば、政府の高官に仕えて律法をよく守るべき人たちであるはずですが、ところが「徒党を組み」ですから一人ではなく、仲間といっしょになって、まるで道端で待ち伏せしている盗賊のように人を殺したということです。いったいどんなことをしたのか。おそらくこのことだろうと言われているのが、第二列王記15章25節に書かれている事件です。北イスラエルの17代目の王がペカフヤという人でしたが、彼の部下であったペカがクーデターを起こし、五十人のギルアド人と手を組んでペカフヤを倒し、無理矢理18代目の王座に就いた。そのとき多くの祭司たちが手を組んだ、そういう事件でした。知恵と力がある者だけが勝ち残る世界。歴史を振り返るならこんな話しはたくさんある。問題なのはこのようなことが神の約束の地で起きたということです。ですから主は、「わたしはおぞましいことを見た」と言われるのは当然です。

2 主に立ち返る

1) 引き裂いたが、癒やす

けれども主は諦めません。こう語ります。1節。「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちを打ったが、包んでくださるからだ。」

いったい私たちは、どのような主に立ち返りなさいと言われているのでしょうか。怒りにからだをブルブル震わせているような主に戻れというのなら、とても恐ろしくて戻れません。けれども聖書は不思議なことを言う。「主は私たちを引き裂いたが、また、癒やし、私たちを打ったが、包んでくださるからだ。」イスラエルとユダは神を裏切り罪を犯しました。その結果、国が減んでしまうという懲らしめを受けます。自分で蒔いた種は刈り取らなければなりません。今なら「自己責任」ということでかたづけられて終わりです。失敗した者には希望が残されていません。それがこの世の中の常識となっています。

しかし主のご計画はまったく違います。その先に意外なことばが続く。引き裂いたが、また、癒やす。打ったが、包んでくださる。裂かれた傷口を癒

やし、打たれたところを包んでくださる。これはなんだろうと思ってしまいます。主は二重人格だろうか。それとも気まぐれなのか。もちろんそうではない。

2) 民を元どおりにする(補囚の帰還)

引き裂く、打つが国を滅ぼすことであることはわかります。でも、傷口を癒やすとか包むとは具体的には何を指すのか。そのヒントが11節後半にあります。「わたしが、わたしの民を元どおりにするときに。」北イスラエルも南ユダも、やがて国が滅ぼされ、人々は外国に連れて行かれます。けれども、もう一度約束の地であり自分たちの故郷でもあるイスラエルに戻ることにと言うのです。まだ国が滅んでもいけません。ましてまだ外国に連れて行かれてもいないときに、あらかじめこう語っておられた。では実際にそうだったのか。なりました。北イスラエルが滅ぼされてからおよそ二百年後、そのときアッシリアはバビロンという国になっていましたが、そこから人々は帰還します。主のみことばのとおりになりました。

3 イエス・キリスト

1) 十字架のさばき：引き裂く

みなさんはこの箇所を読んで自分とどんな関係があるのか、ピンとこない。そんな感想を持たれたかもしれません。ではこう考えてみたらどうでしょうか。ホセアは、北と南の国の行く末のことを語りながら、同時にイエス・キリストのことを語っている。そのような視点を据えてみるのです。

イエス・キリストの十字架とはなんでしょうか。言うまでもなく、私たちの罪の身代わりとなって神のひとり子がさばかれた場所です。今日のことばで言えば、私たちは、この祭司たちのように徒党を組んで盗賊のように待ち伏せし、道で人を殺してきた者です。実際に人を殺したかどうかではありません。主は、私たちの心の中のことをご存じです。心の中には、口には絶対に出したくないことが渦巻いている。そうやって心で人を殺している。その罪を背負われて、イエスは十字架でその御からだに裂かれました。「主は私たちを引き裂いた」と言われました。私たちの代わりに主のみからだに裂かれました。

2) よみがえり：癒やす

そしてホセアが語ったもう一つのこと。引き裂くけれどもまた、癒やす。これもイエス・キリストのことを語っている。この方は死んで墓に葬られまし

た。しかし父なる神はこの方を生き返らせ、三日目に立ち上がらせてくださった。癒やす、包むがここにある。

これが私たちの主であると言われます。こんなことは、誰かに教えてもらわなかったならまったくわからなかったでしょう。聖書を読んで初めて知らされました。

私はいまでも思い出します。32年前、救いを求めて教会に駆け込んで私は牧師にこう言った。「先生、クリスチャンになりたいのです。」そうしたら牧師はこう言いました。「まず聖書を学んでからにしましょう。」所持機に言えば、牧師から励ましのことばでも聞けるかもと期待していたのでちょっと拍子抜けしました。とにかく次の週から聖書の学びが始まりました。そして驚いた。ずっと探し求めていた真理、なぜ人は生きるのか、どこに向かって歩むのか、すべて私が知りたかった答えがここにあった。その時初めて私は主を知り、この方は神であり救い主であると信じる事になりました。

3) 確かに現れる

でも、いまさらながらですが、なぜ主を信じるのか。みなさんはどう答えるでしょうか。いろいろな答えがあるでしょうが、だれもが納得する答えがあります。3節後半です。「主は暁のように確かに現れ、大雨のように私たちのところに来られる。地を潤す、後の雨のように。」暁とは、夜明けのことです。明日、ほんとうに東から日が上るのか。そんなことを疑う人はだれもいません。あまりにも当たり前すぎるからです。「後の雨」というのはイスラエルに3月頃に降る雨のことで、「先の雨」というのもあってそれは11月頃に降る雨のことだそうです。雨季と乾季がはっきり分かれています。後の雨というのは、たぶん私たちが春を待ち望む気持ちに似ている。厳しい冬が終わって春を迎え、桜が咲くのを見て心が晴れやかになる。その光景が、ずっと変わらずに繰り返されてきて、来年春が来ないと疑う人はいない。それと同じように、主はあした朝日が昇るように、春に必ず桜が咲くように、必ず現れてくださる。それほど確かだと言われる。主のみことばがこれほどに確かなものであるならば、私たちはここに書かれていることをすべて信じる事ができる。この主のみことばとともに歩んでまいります。